

埋文センターニュース

第9号

1999.3.31

津市埋蔵文化財センター



1月30日 石切山遺跡現地説明会

高野尾町 いしきやま 石切山遺跡 縄文～中世の遺構を確認！

今回の調査は、ほ場整備事業に伴うもので、遺跡が掘削を受ける部分約2,000㎡について発掘調査を行いました。

調査の結果、縄文時代のおとし穴と見られる土坑3基、古墳時代後期の小石室を持つ古墳4基、中世の掘立柱建物6棟・井戸3基・溝2条・道・土坑など多数の遺構が見つかりました。また、おとし穴と見られる土坑からは縄文土器が、小石室からは副葬品として供えられた須恵器（杯・高杯・壺）や碧玉製の管玉が、掘立柱建物や井戸などの中世の遺構からは素焼きの皿・鍋・羽釜や山茶碗、青磁の碗・皿などが出土しました。

市内ではほとんど類例のない小石室をはじめ中世の集落の発見など、これまでほとんど発掘調査の行われていない高野尾町の遺跡の実態を知る上でもたいへん意義のある調査であったと言えます。

(池端)



主要遺構略測図 (1:500)



縄文時代のおとし穴



調査中の1号小石室



平面プランのよくわかる2号小石室



中世の掘立柱建物

最近の発掘調査から たるみ ～垂水A遺跡～

垂水A遺跡(1)は、津市の南部を流れる相川の北岸にある縄文時代から鎌倉時代を中心とする遺跡です。今回この遺跡の一部に道路が建設されることとなり、その部分約1,500㎡について発掘調査を行いました。

付近には、市内最大の前方後円墳である池の谷古墳(2)や埴輪を焼いていた法ヶ広窯跡(3)、そして古墳時代の土器焼成坑や大型建物の見つかった高茶屋大垣内遺跡(4)などがあります。

今回の調査した部分は、遺跡の縁辺部にあたり遺構・遺物ともに少なかったのですが、縄文時代・古墳時代・鎌倉時代と人々の生活の跡が確認されました。

調査区の南端には、縄文時代の河道がありました。埋まった土の中には人頭大ほどの石もあり、当時流れが相当急であったことがわ

かります。深さは2m近くあり、その規模から昔の相川と考えられます。

古墳時代では、調査区の南部でみつかった直線的な溝が注目されます。幅約0.9m、深さ約0.6mで、断面がV字形になっていて、防禦を意識した溝と考えられます。また、この溝の西側から土器が比較的多く出土していて、調査区の西側に竪穴住居などがあると考えられます。

そして、やや時間をおいて鎌倉時代に再び集落が築かれます。建物は確認されていませんが、生活に不可欠な井戸の存在や、谷状の低い部分からは当時使われた土器片が多数みついていることから、調査区の西側に当時の集落が広がっていると思われます。

その後は集落は築かれず、水田や畑として今日に至ったと考えられます。(米山)



垂水A遺跡位置図(1:20,000)



古墳時代の溝(西から)



調査区全景(北から)

遺跡・遺物紹介⑧ 池の谷古墳出土の円筒埴輪

池の谷古墳は、津市大字垂水の伊勢湾が一望できる標高約50mの丘陵上に造られた津市最大の前方後円墳です。古墳の全長は約90mと伊勢湾西岸でも有数の規模を誇ります。池の谷古墳については、埋文センターニュース第6号でその概要を紹介しましたので、今回は池の谷古墳から出土した円筒埴輪について詳しく紹介したいと思います。

一口に埴輪と言っても、埴輪には大きく二つの種類があります。一つは、ここで紹介する円筒埴輪、もう一つは、家・武器・人物・動物などをかたどった形象埴輪と呼ばれるものです。円筒埴輪は、円筒形のものに数本の突帯を貼りつけて、その間に三角形や四角形、円形の透し孔をあけたもので、古墳の墳頂部や墳丘をとりまくように立てならべられていました。

さて、池の谷古墳では、昭和46年度と昭和51年度に墳丘の一部で発掘調査が行われ、その際に出土した円筒埴輪が津市埋蔵文化財センターに保管されています。池の谷古墳の円筒埴輪は、小さな破片ばかりなので、もとの形を完全に復元することはできませんが、口縁部が直径35～40cm、底部が直径25cmほどになるものと思われます。また、胴部には逆三角形の透し孔があります。

池の谷古墳は、埋葬施設の構造や副葬品のことなどが全くわかっていないので、今のところ、これらの円筒埴輪が古墳の造られた時期を推定する唯一の手がかりです。池の谷古墳の円筒埴輪は、透し孔の形などが、県内の4世紀末頃に造られた古墳から出土する円筒埴輪と似ているので、それに近い時期に作られたものと考えられます。

池の谷古墳は、この地域に君臨した首長を葬った墓と考えられていますが、それでは、どうしてこのような大型の古墳が垂水丘陵に

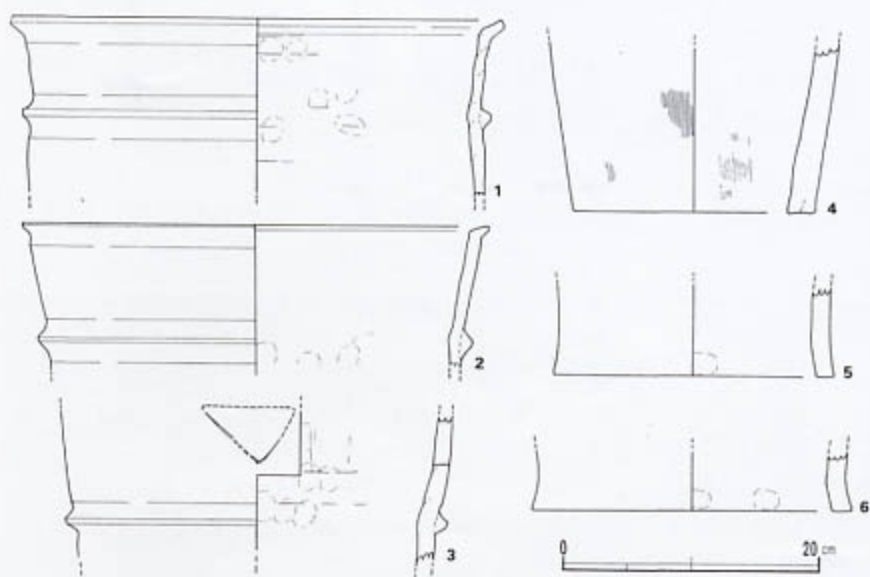
造られることになったのでしょうか。

池の谷古墳南麓を流れる相川は、古墳の1kmほど下流で高茶屋台地から流れてくる天神川と合流して伊勢湾に注いでいます。相川と天神川の合流点に近い藤方が、古くは「藤湯」と記されたこと、今でも相川と天神川の河口付近が海拔0mの低湿地であることなどから、かつて藤方周辺には湯湖が形成されていたと考えられています。湯湖は天橋立（京都府）のような砂嘴によって外海と分離された入江で、天然の良港と言われています。

また、平安時代に成立した『皇太后宮儀式帳』には、全国を巡歴した伝説の斎王倭姫命が「藤方片樋宮」で「阿佐加」の悪神を平らげたという記述があり、このような伝承の存在からも、藤方周辺が古くから伊勢湾西岸の陸上・海上交通の拠点的な地域であった可能性が高いと考えられています。

池の谷古墳周辺には、高松C遺跡（津市半田）や四ツ野B遺跡（津市高茶屋）など、古墳造営の基盤となるような弥生時代から古墳時代の遺跡が多く存在します。池の谷古墳の築造よりは少し時期的には下るのですが、最近調査された高茶屋大垣内遺跡からは、6世紀前半頃の土器焼成坑が発見され、『日本書紀』雄略天皇17年3月条にある「伊勢国藤形村」から朝廷に献じられた土師器工人の記述との関連が注目されています。このほかにも、相川流域では、久居古窯址群（久居市藤ヶ丘町）、藤谷埴輪窯跡群（津市半田）など、5世紀末から6世紀初頭に須恵器や埴輪を生産していた窯跡も発見されており、この地域で土器生産が盛んに行われていたことがわかっています。

池の谷古墳は、このような地理的・歴史的環境を背景に築造されたものと考えられています。（藤田）



円筒埴輪口縁部



円筒埴輪胴部

埋文センターこの1年

開設以来4年を経過した今年、センターの事業として新たに「出張講座」を実施しました。まずは市内の小学生を対象としたものですが、広く市民の皆さんに埋蔵文化財の保護や遺跡の発掘調査について知っていただくために、今後も継続していく予定です。

発掘調査関係では、2遺跡の本調査を実施しました。高野尾町の石切山遺跡は、昨年に続く第2次調査で、縄文時代から中世にかけての遺構の広がり確認され、中でも4基の小石室は市内でもあまり例を見ない貴重な発見となりました。垂水A遺跡では、古墳時代の溝や鎌倉時代の井戸などが見つかりました。

夏には、郷土の歴史とルーツを考える「安濃津物語」の一環として特別展覧会を開催しました。「安濃津をめぐる文化と交流」と題した展覧会には2,000名を超える入場者があり郷土の歴史への関心の高さが表れています。

11月には、当センターも加盟する全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会の東海北陸ブロック会議が津市で開催されました。調査体制をはじめとする課題に対し、各加盟機関による活発な意見交換が行われました。

一年を通じセンターの見学者は約600人に上り、昨年比で約3割、小中学生だけでなく一般の方々の来館も増加しています。

センター日誌抄

平成10年

- 10月12日 《調査》 垂水A遺跡調査開始
- 10月22日 《見学》 敬和小学校 43名
- 10月23日 《会議》 県埋文担当者会議に出席
- 11月12日 《調査》 イノ坪・ロノ坪遺跡試掘
《見学》 西橋内中学校「家庭教育学級」 22名
- 11月18日 《見学》 豊里公民館 40名
- 11月19日 《会議》 全国公立埋文協東海北陸ブ
～20日 ロック会議開催
- 12月3日 《見学》 修成幼稚園「家庭教育学級」
22名
- 12月18日 《調査》 垂水A遺跡調査終了

平成11年

- 1月12日 《調査》 竹川遺跡隣接地試掘調査
- 1月22日 《見学》 豊が丘小学校「家庭教育学級」 30名
《調査》 石切山遺跡航空写真測量
- 1月30日 《普及》 石切山遺跡現地説明会
参加者約80名
- 2月2日 《調査》 津港跡部線関係試掘
～3日
- 2月9日 《調査》 石切山遺跡調査終了
- 2月18日 《会議》 県埋文連絡調整会議に出席
- 3月2日 《会議》 県埋文担当者会議に出席
- 3月31日 《会議》 津市文化財保護委員会

《編集後記》

この号の編集を終える今、梅の花が満開の季節を迎えています。刊行の頃には桜も見頃になっているでしょう。毎年訪れる花の便りとともに、また新しい1年のサイクルが始まろうとしています。4月、まずは今年度調査遺跡の報告書に向けた担当者のスタートが切られます。

(中)

発行日：1999.3.31

編集・発行：津市埋蔵文化財センター
〒514-0058
三重県津市安東町1225
TEL 059-229-0210
FAX 059-229-4601

印刷：森田印刷株式会社